

OB・OG 会長の挨拶 —結婚を機に想うこと—

第1期ゼミ長 白木 俊介

今年でOB・OG会誌もVol.4となりました。毎年、「OB・OG会長の挨拶」というお題で書かせていただき、先頭に掲載されるので、どうしても堅苦しいことを書くことが多かったのですが、今回はかしまったことよりも、自分の内面を素直に書いてみることに挑戦してみようと思います。後輩からすると、目標の先輩とはほど遠いのかも知れません。しかし、虚勢を張らずに、OB・OG会誌に自らの内面を書けることこそ、実は、小野晃典研究会の仲の良さ、親しみやすさがあるのではないかと思うわけです。

自分の大きな夢を追うことが
今までのぼくの仕事だったけど
君を幸せにするそれこそが
これからのぼくの生きるしるし

このフレーズは、1974年6月5日にリリースされたチューリップの「青春の影」の詩の一部です。すでに、この曲が生まれてから36年を経過し、社会は大きく変化を遂げているにもかかわらず、結婚をテーマとしたこの曲のフレーズには、今も昔も変わらない共感があるようです。私自身も自分が生まれる前に流行ったこの曲に、これ程までに共感するとは思ってもいませんでした。こんな古い歌に共感する自分の感情を客観的に考察すると、「例え、技術が急速に進化し、グローバル化が進んだとしても、人間はそれほど変わらないのではないか」ということです。

ご存知のとおり、私は昨年、入籍をしてもうすぐ結婚式を迎える訳ですが、結婚をしてライフステージが変わると、自らの価値観もこれほどまでに変わるということを、身をもって感じています。今回はそのいきさつを簡単に紹介したいと思います。

◆シンガポール（2010年6月）

資本主義がますますグローバル化・先鋭化していく中、日本経済は停滞しています。日本の多くの企業が、日本国内のマーケットに焦点を当てるのではなく、急成長するアジアマーケットに焦点を当てるようになってきました。そんな状況下において、「自らの成長できる場所はどこか」と考えた時にアジアへの転職を考えたわけです。昨年の6月ころ、シンガポールの広告代理店の現地採用の募集を見て応募をしたのがきっかけでした。この時期には、すでに入籍をしていたのですが、「何とかなる。」とっていました。もちろん、妻にもシンガポールで働く話をしていました。結婚する前から常々、思っていたことは、仕事



OB・OG 総会 2009 で先生に教授昇進記念品を手渡す著者

や自らの成長が第一優先、積極的にリスクをとってでも、前へ進もうという考え方でした。変化の激しいこの時代、ドラスティックに行動ができない限り、大きな社会のうねりに巻き込まれてしまうという危機感が常に、自分の背中を押していたのです。

6月からの1ヶ月間、相手側の会社と何度かのメールでのやり取りと電話面接を終え、最終面接のためにシンガポールに赴く頃になって、転職先の部長から突然、電話がかかってきました。「本当に来る気があるのか、今週末にゆっくりと考えてみる。」いよいよ話が具体的となり、その週末、もう一度、妻と話をしました。彼女は「それが、あなたのやりたいことであれば、行ってきなさい。」と言います。彼女自身も、過去にカナダへの海外留学を経験があるため、私が海外に対して非常に興味を持っていることを十分に理解してくれていました。さらに、現在、看護師を目指して大学で勉強をしている彼女だからこそ、お互いの夢を追いかけることを尊重してくれてもいました。一方で、この転職が現実化すると、お互いの夢を追うために、新婚早々から彼女が大学を卒業するまでの3年間は、単身赴任となります。お互いに夢を追いかけていたいという思う一方で、離れて生活することに対して、非常に複雑な気持ちを抱えたまま、すぐにフライトの準備に入ったのでした。

◆現地（2010年7月3日～7月5日）

3日間という強行スケジュールで、現地での面接に臨みました。シンガポールは経済成長の恩恵で活気があり、若い人の熱気のある街でした。旅行の時とはまったく別の緊張感の中、様々な方とお話をしました。会う人は、みな、新たなマーケットの先駆者として、フロンティア精神を持っており、日本の良い部分と海外との最善の融合を期待している人ばかりでした。一方で、日本人としてのプライドや文化が邪魔をして、現地の方との対等な協働作業が円滑に進まないといった海外ならではの問題も抱えていました。面接に関しては、相手側の会社は歓迎ムードで、迎えてくれており、スムーズに話が進みました。

「なぜ、奥さんも一緒に連れてこないんですか？日本の看護師資格は、シンガポールでは役に立ちませんよ。アジアで働く決めていたのであれば、もう必要ないんじゃないですか。」転職後、同僚になるであろう女性から尋ねられました。この質問をされて気づいたことは、「海外で経験を積んだ後、いつかは日本の戻ってくるのが当然だ」と頭の中で考えていたことでした。一方で、現地採用として働く彼らは、アジアで一生働き続ける気概を持っているということに気づかされたのです。

◆大切なこととは何か

日本に帰国後、じっくりと考えました。そして、多くの人に相談しました。人生のターニングポイントは、何度かおとずれると思いますが、30歳前後のタイミングでは、本当に大きな決断をスピーディーに行わなくてはならない時期だと感じます。特に、転職といった神経質なテーマであると、会社の同僚や先輩には相談ができません。こんな時に、相談にのってくれるのは小野ゼミの友人をはじめとした大学の頃の友人ばかりなのです。

大学の時に知り合った友人がタイで働いていました。彼にも、今回の転職について相談をしたところ、こんな返答が帰ってきました。「おれの妻は、おれの仕事には口を出さないとはっきりと明言してくれて、週末働こうが、女性の香水をプンプンさせてこようが、一応何も言わずにいてくれるのが助かるけれども、別々で生活するという事だけは、絶対に反対しているからね。」

海外にいる人ほど、家族の大切さ、そして、別々に暮らすことの問題を非常に強く意識しています。いくらインターネットが進化して skype で顔を見ながら話ができたとしても、すぐに携帯電話で連絡が取れるようになったとしても、羽田空港からシンガポールへの深夜便で日帰り出張や週末デートができる距離になったとしても、家族が離れて暮らすことは良くないということです。これは、いつの時代も変わらないことなのでしょう。

今回の一件は、自分にとって「いったい何が大切なのか。」ということ突きつけられる機会でした。上述の歌詞のように、「今までは自分の夢ばかり追っていましたが、これからは二人の夢を追うステージに入ったのだな」と、当たり前なのに気づかされたのです。入籍は、思い立ったら、直ぐに出来るわけですが、まだまだ、「自分は夫としての自覚も度量もなかったのだなあ」と気づかされる一件でした。独身が懐かしくも思いますが、夫としての姿勢はこれから少しずつ、身につけていくことなのでしょう。

ある転職エージェントは、「転職でのリスクを恐れて何も行動を起こさなかったということさえも、自らが取った選択であり、リスクが潜んでいます。今の選択はよく考えた結果なのか、知らず知らずのうちにした選択なのか、そして、そこにリスクは潜んでいないかを考えてみてください。」と行動を促します。今回の転職は結果的に辞退し、今の会社に勤めている訳ですが、よく考えた上での選択でした。このタイミングで自分のポジションを確認できたこと、そして、海外で働くことを確認できたことは大変、有意義なことでした。今後は妻と二人で、仕事も家族生活もじっくりと考え、時にはドラスティックな決断をしたいものです。



ウェディング・パーティーの招待状に使用した写真

◆最後に

まだ、30代になったばかりですが、歳を重ね、40代、50代になる頃には、本当に重い決断を強いられることが増えていくと思います。それは若かった頃のように、やり直しが効かなくなるからこそ、プレッシャーも多くなるわけです。そんなときに、本当に相談のできるのは利害関係を持たない友人だと思います。私にとって小野ゼミの仲間とは、そういった友人だと思います。

現役生の皆さんも、是非、社会人になったときに相談ができるゼミの友人をたくさん作ってください。小野晃典研究会での濃密な2年間を過ごせば、必ず、そんな友人ができると思います。なぜなら、小野晃典研究会では、どこのゼミより時間をかけて、議論を重ね、時には失敗を重ねながらも、果敢に挑むプロセスを何度も行っているからです。情熱をこめて、真剣にぶつかる場があるからこそ、本当の友達となりうるのです。